

～インド神話を楽しもう～

インド神話集 ナイミシヤの森 VOL.2

「蛇族の因果と聖者アースティーカ」

クルクシェートラの戦いの後…

マハーバーラタで伝えられた壮絶な戦いが終わり、多くのクシャトリヤがこの世を去った。クリシュナもこの世を去り、世界は、カリユガの時代に突入した。

そして、激しい戦禍を乗り越え勝利したバラタ族の王位は、クリシュナから教えを受けたアルジュナの血筋によって受け継がれていた。その名は、パリクシット。彼は、アルジュナの孫にあたる。

パリクシットが王位に就いてからの60年間にはバラタ族は、広大な領土を復興させ、かつての栄華をもたらしていた。

パリクシット王は、バラタ族の系譜に恥じない勇者であり、信仰深く、知性にもあふれた立派な人物であったが、カリユガの時代によるためであろうか、その行為が時に思慮にかけられることもあったのも事実である。

まずは、カリユガの時代を象徴する行為の混乱が、逸話として残されているので、ここに紹介しておこう。

パルクシット王が三本足の牛を助ける話…

ある日、パルクシット王が川のほとりを歩いていると、牡牛と牝牛が、男に虐待されているのを見かけた。

「何をしている。すぐやめなさい！」



王は、男の乱暴を制し、二頭の牛に近寄った。よく見ると、あろうことか牝牛（おうし）の足が三本切り落とされている。そして、不思議なことにその牡牛が突然に人間の言葉で王に話しかけた。

「王様、お守りくださいませありがとうございます。なぜ、私がこのような苦しみを受け

ねばならないのか、その理由はわかりません。」

パルクシット王は、この人語を放す牡牛は、徳の権化であり、牝牛は大地の権化であると悟った。そして、彼らを苦しめていた男は、悪徳の権化カリであると知った。王は、足を失っている牝牛に語った。

「あなたは、まさしく徳の権化ではありませんか…。そして牝牛の姿をとって私の前に現れているのですね。あなたの四本の足とは、苦行、純潔、慈愛、誠実を表しているのでしょうか。しかし、疑いと執着と高慢がカリユガの時代を征服する時、あなたの三本の足が失われ、誠実という足一本だけで立っておられるのを意味しているのですね。そして、あの男、悪鬼カリは、その誠実の足さえもつぶそうとしてるのでしょうか！」

私は、このような目にあっているあなたがたを見過ごすわけにはいきません。今、ここで悪鬼カリを成敗してご覧にいれましょう。」

こういいながら、王は悪鬼カリの方を向き、剣を抜いて斬り殺そうとした。しかし、悪徳カリは、すべてを見透かしたような奇妙な笑顔をみせながら、王の足元へ平伏した。

「慈愛にみちた王様、王たるものは、自分の領土にあるものは良き事、悪しき事にかかわらず、全てを等しく扱わねばならないはずでしょう。そのような方が、名君として、後世に伝わってゆくのです。賭博、飲酒、女性への暴力、生きもの虐待がはびこる場所は、私におまかせください。そのようなものがはびこる場所は、私がすべておさめて参ります。偽り、高慢、情欲、嫉妬、憎しみのある場所も私におまかせください。」

パルクシット王は、悪鬼カリをこの場で成敗しようとしたその手をやめ、領土から立ち去らせるわけでもなく、王の役目と慈悲として、識別の無い言葉に従った。そもそも、パルクシットの名前の意味は、「滅亡しようとしている時(パルクシート)」に由来しているのだ。

こうして、カリユガの時代に生まれたパルクシット王は、識別智にかけた行為によって、蛇族との因果応報に苛まれてゆくのであった。

パルクシット王の過ち

60年間領土を統治してきたパルクシット王は、闘いでは負け知らず、特に最高の弓使いであった。そして、他のクシャトリヤと同様、狩りを非常に好んだ。鹿、猪、ハイエナ、水牛などを狩るため、あちこちの森へ好んで出かけて行った。しかし、パルクシット王も老いには勝てなかった。若い頃に比べれば体力も弱まり、疲れやすくなっていた。

ある日のこと、パルクシット王は、狩りに出かけた。百発百中の矢は鹿に命中したが、仕留めるまでにはいかず鹿は、森へ逃げ入った。

「しまった、だが、遠くへ行けまい！」

鹿の後を追って、王は、森の到る所を探し回った。

しかし、鹿を見つけることはできなかった。実は、瀕死の鹿が消えてしまったのは、傷ついた者がこの世を去る暗示でもあったのだが、パルクシット王は、それを感じ取ることもなかった。

王は、森の中を歩き回り、疲労と渇きでまいってしまった。すると、生え茂る木々の間に、質素な庵があるのを見つけた。近寄ってゆくと、そこでは牛小屋に座って、母牛の乳を吸う子牛達の口からもれる泡末を飲んでいる一人の聖仙がいた。王は、息せき切って近づき、苦行に専念する聖仙へ尋ねた。

「おお、聖者よ、私は、王のパルクシットだ。このあたりに、私に射られた鹿が、走っていったようだが、見かけなかったか？」

しかし、聖仙は、沈黙の行に専心しており、返答をしなかった。聖者は、王のことなど気にもとめず、何事もなかったように座り、瞑想に入った。パルクシット王は、戸惑いながらまた話しかけた。

「なあ、すまんが、水を一杯わけてもらえんか？鹿を追いかけて歩き続けて、喉が渇いてたまらんのだ。」

聖者は、目を閉じたまま、微動だにせず座り続けているのみであった。この態度に王は腹がたった。そして、悪戯心と怒りから、王は、その近くで死んでいた蛇を弓の先で取り上げ、聖仙の首にかけて蔑んだ。



しかし、聖仙は、まったく抵抗せず、一言も発せず、怒ることも、嫌がることも無くそのまま座り続けていた。

パリクシット王は、飢えと渇きと疲労を感じながら、聖者に蛇をかけたまま宮殿へ帰っていった。

蛇を首にかけられた聖仙は、寛容であったゆえに、パリクシットが、王としての資質に忠実であっただけであると理解し、決して彼を呪うことをしなかった。しかし、愚かなパリクシット王は、その聖仙がこのように高德な人物であることに気づきもせず、侮辱的行為をしてしまったのだ。

死の呪いをうけるパリクシット王

さて、この聖仙には、若く、凄まじい力に満ち、この上なく苦行に専念する息子がいた。その名は、シュルンギ。厳格で、誓いを固持し、一方で怒りっぽく、一度頭に血が上れば、なだめしずめることなど到底できそうもない人物であった。彼は、父である師を崇拜し日々、修行に邁進していた。シュルンギは、しばらく庵を離れ巡礼の旅に出かけていたため、父が悲慘な目にあつた姿を知らずにいた。そして、修行の成就と自らの成長に満足を覚えながら、父の待つ庵へ久方ぶりに帰ってきた。

シュルンギが庵に着くと修行仲間の友人のクリシャが、喜んで出迎えてくれた。巡礼の成果を自慢げに語るシュルンギにクリシャは、

嫌気がさし、ふざけ笑いでからかいながら、シュリングの父の身に起こったことを話し始めた。

「なあ、シュリング、得意になるんじゃないぞ。お前が苦行者であり、すごい力を持っているなら、お前の父親が蛇の死骸をかけられているのを想像できるだろう？ 実の父親が死んだ蛇を下げて無様な姿を見れば、お前の誇り高ぶった言葉は、どこへゆくかな？ お前の父親は、こんな扱いをされて何もしなかったのだぞ！ 俺は、まるで自分にされたことみたいに胸が痛んだよ！ そして、お前の父親は、今もまだ、死んだ蛇を首にかけられたままの姿で座っているんだ、まずはその目で確かめてくるがいいさ。」

シュリングは、怒り心頭で話を聞いた。

「本当か？！ その悪王に、俺の父親は、やられっぱなしだったのか？ 教えてくれ、クリシュ！ くそー、俺の苦行の力を見るがいい。必ずや、目にものをみせてやる。

悪しきパルクシット王よ！ 私の父に死んだ蛇をかけたお前は、毒牙を持つ恐ろしい蛇神タクシャカによって七日の内に、死の神ヤマのもとへ送られるだろう。ブラフマナたる我ら宗教者を侮辱したバラタ族の汚しは、無様な死を迎えるがいい！」

シュリングは、怒りにまかせた呪いの言葉を吐き、哀れな父のもとへむかった。友人クリシュの言うとおりに、死んだ蛇をかけられた父がそこに座っていた。その姿を見て、悔し涙を流し言った。

「お父さん、あの邪悪なパルクシット王があなたを侮辱したと聞き、私は怒り呪いました。あの最低の男は、この恐ろしい呪いにふさわしいでしょう。七日後、あの恐ろしい蛇タクシャカが、死を贈るのです。」

「なんと早まったことをしたのだ…わが子よ！お前は決して善行を為したわけではないぞ。復讐などというものは、我らブラフマナのすべきことでは無い。我々は王の領土に住んでおり、彼によって守護されている。彼が私にしたことは、良くはない。しかし、息子よ！我々のような者は、あらゆる場合に、忍耐をもっておらねばならぬ。損なわれた法は、必ず自分の身に返って苦しめるのだ。考えてもみなさい、王の守護がなければ、我らは安心して修行の生活を送ることはできない。政治に長けた者の功德の配分を受けて我らもこの地で安心して暮らせるのである。パルクシット王は、歴代の王同様に、ふさわしく我らを守護している。今日、たまたま彼は飢え、疲れ、苦勞して、ここへやってきた。しかし、私が沈黙の行の最中であることには気づきもしなかった。それゆえの行為であったのだ。私にとっては取るに足りないこと。しかし、お前は幼稚さから性急に呪いをかけ悪しき行為を為してしまった。王は、如何なるときも我らの呪いをうけるべきではないのだよ。」

「お言葉ですが、私が無謀なことをしようと、あなたの気にいるにせよ、気にいらぬにせよ、もはや空言にはなりません。それは決して変えられないのは、ご承知のはず！誓って言いますが、私はふざけている時も嘘は言いません。いわんや呪いの言葉はまさにそのまま成就するでしょう。」

「お前が、恐ろしい力を持ち、自らの言葉に忠実であることは知っている。お前が嘘を言ったことは無い。この呪いも叶うだろう。しかし、私は父としてお前に助言せねばならぬ。お前のような力を有する者の怒りはこの上なく増大する。その幼稚さによる無謀な行為には、

黙っていることはできないのだ。お前は、沈黙を守り、森に過ごし、その怒りを捨てよ。怒りは、苦行者たちが苦勞して集めた徳を奪うものだ。徳を欠いた者は、望むべき所へ到達できない。忍耐する者には、この世界だけでなく、真理の世界も存在を持つ。常に、忍耐を心がけよ！感覚を制御せよ。

そして、私はパリクシット王に使いをだす。私の幼稚で分別の無い息子があなたの行為をみて怒り、呪ったことを知らせるために。」

パリクシット王の苦悩

聖者からの使いは、すぐに宮殿へ行き、恐ろしい呪いがかけられてしまったことを、あるがままに告げた。

「王様、あなたが、弓の端で、死んだ蛇を肩にかけた聖者は、シャミーカという聖者でございます。聖者は、あなたの行為に耐えておられました。その息子は、我慢できませんでした。彼は、父の知らぬまに、今日、あなたを呪ったのです。『七日のうちに、恐ろしい蛇神タクシャカが、あなたに死をもたらすだろう』と。聖者であろうと、ブラフマー神であろうと、ひとたび発せられた呪いの言葉を消滅させることはできません。慈悲深いシャミーカ聖仙は、あなたの安堵を少しでも願ひ私を派遣しお知らせするよう申したのです。」

パリクシット王は、恐ろしい話を聞いて、自らが行ってしまった不徳な行為を後悔した。

(私が声をかけても全く無視されたのは、沈黙の行をなさっていたからだったのか…)

また、そんな愚かな自分に同情してくれたことを聞いて、王はさらに苦悩した。偉大なるバラタ族の末裔たるパリクシット王は、自らに死が降りかかることを悲しんだのではなく、自らの愚かな行為を悔いたのであった。

「わざわざ伝えに来てくれてすまなかった。礼をゆうぞ。どうか聖仙シャミーカにも謝罪の気持ちと、この哀れな王に慈悲を給われますようにと伝えてくれ。」

聖仙の使いを返した後、パリクシット王は意気消沈し、大臣たちと協議した。家臣たちは驚き慌て、なんとかこの局面を乗り切ろうと警護を嚴重にし、まさかの時に対応するため、医師、薬草、解毒のマントラに通じた僧を配備した。

策を練る大蛇神タクシャカ

そして、運命の七日目は、すぐやってきた。若き修行僧の言葉を受けた大蛇神タクシャカは、蛇族の中でも猛毒を持ち、その狂暴さで恐れられていた。しかも、こともあろうに、あの天界の王インドラ神とも懇意の仲であるのだ。世界は、サットヴァ、ラジャス、タマスという三種のグナで成り立っているが、サットヴァ(善性)とタマス(暗性)は、とても結びつきやすい。天界の王インドラ神と大蛇神タクシャカが、大変に仲が良いのも頷ける所であった。

蛇神タクシャカが、咬むものはその毒によって命を燃やし尽くし全てを奪い滅ぼしてしまう。それ故に、パリクシット王の宮殿は、兵や

薬草、マントラなどあらゆるものが準備され入念に守られた。

大蛇タクシャカは、宮殿の厳重な警備をみて考えた。

「これでは、簡単に近づけぬ、さてどうしたものか？」

タクシャカは、家来の蛇達を呼び寄せ作戦を練ってこう言った。

「お前達は、苦行者の姿に化け、果実と葉と水を持って、そして、王に近づき、それらを奴にもたせるのだ。」

タクシャカに命じられた蛇達は、言われた通りに変身し、果実などを持って宮殿を訪ねた。厳戒態勢の宮殿は、緊張に包まれていた。

蛇に化けた苦行僧達は、『王様を始め皆さまへ、お力になれますように…』と持ってきた果物類を臣下のものへことづけ帰っていった。

僧からの差し入れと聞いた王は、安心して受け取った。

「諸君らも、苦行僧たちがもってきた、この美味しそうな果実を食べなさい。力がつくぞ。」

パリクシット王は、大臣たちと共にその果実を食べようとした。ところが、王が手にとった果実の中に小さな虫がいた。それは非常に小さくて、黒い眼を持ち銅の色をしていた。王はそれをつかんで、大臣達に言った。

「もうすぐ太陽が沈む！これで呪いの日も終わりだ。タクシャカも現れる気配など無く、今や危険は遠のいたぞ。さあ、聖者の言葉とやらが、真実となるならば、この虫が、タクシャカとなって私を咬んでみるしかなかろう！さあ、私を咬め、そうすれば、俺の罪も免れるであろうしな！」

王はそういと、虫を喉の所へ置き、急に笑い出した。死の運命は、彼を既にとりこみ、思慮深いパリクシット王は、狂ってしまった。



そして、けたたましい笑いをあげる王の喉に、果実から抜け出したタクシャカが、一瞬のうちに巻き付いた。

大臣たちは皆、蛇に巻き付かれた彼をみて顔色を変え、悲しみ泣き叫んだ。しかし、その蛇がうなりをあげると一目散に全員が逃げ出した。蛇神タクシャカは、蓮華色に輝き、蛇の毒から生じた火に包まれ燃えている楼閣を捨てて逃げ惑った。

パリクシット王は、運命によってこの世を去り、バラタ国は、まだ幼き子供であったジャナメージャヤを王につけ、家臣達と共に統治され平和な日々を取り戻した。

蛇族の因果は続く

しかし、蛇族の因果応報は、さらに続いていた。その始まりは、乳海攪拌によって出現した馬の色で賭けをした姉妹によるものだった。(ナイミシャの森 vol.1 参照)

賭けに負けたくない蛇達の母カドゥルーが、息子達の蛇に馬に巻き付いて黒くみえるようにと命令したが、卑怯な策に反抗し行動しなかった蛇達がいた。それが、蛇王ヴァースキーやタクシャカ達であったのだ。怒ったカドゥルーは、命令を聞かない彼らに『バラタ族の王、ジャナメージャヤの蛇祭祀で焼かれてしまえ！』と呪ったのだ。

そして実の所、パリクシット王が恐ろしい毒を持つタクシャカに殺されてしまった物語は、カドゥルーが発した呪いの契機となる事件であったのだ。

蛇族の祈り

さて、馬の賭けの際に母カドゥルーに逆らい呪われてしまった蛇王ヴァースキーは、他の知恵ある蛇達と共に、母の呪詛に対しどのように対処すべきか協議をした。

「ああ、罪なき者達よ！我らに課せられた呪いが発せられた経緯は知っているだろう。我らはこれにどうやって対処すべきか話あおうではないか。呪詛には必ず対処法があるはず。しかし、母に呪われた者が救われることは無い。あのブラフマー神さえも、呪っている母を止めることはなかったのだから。手遅れにならぬうちに。蛇を根絶やしにしようとするジャナメージャヤ王の蛇祭祀が実現しないように、あるいは失敗するような方策を考えようではないか。」

ある者は言った。

「我々が苦行僧に化けて、『あなたの祭式を取りやめてください。』と要請するのはどうか？」

「いや、我らは王の側近に化けて、祭式が中止されるような意見を述べるのはどうだろうか？王から祭式の効果を尋ねられた時『その効果はありません！』と答えるのだ。あるいは、その祭式をやろうとするものがあれば、そいつの首に咬みつき殺してしまうというのもよいと思う。王の祭官が次々と現れても、全てのものに咬みつくだ！」

このような意見も出されたが、徳の高い蛇が乱暴な意見を諫めた。

「ブラフマナを殺害するのは無思慮であり、悪である。このような因果を被った際には、法(ダルマ)に基づく鎮静法が最も良いはずだ。非法(アダルマ)に基づくことは世界をも滅ぼしてしまうものだから。」

「では、雷を伴う雲となり、護摩祭祀を雨によって消してしまおう。」

「いや、夜中に忍び込み、祭祀に必要な道具を全て盗み出そう。いっそのこと、王を誘拐し監禁してしまおうではないか！」

協議の主宰でもあった蛇王ヴァースキーは、このような意見しか聞かれずに悩んだ。ヴァースキーは乳海の攪拌の際には、マンダラ山に巻き付き、綱となって、アスラ族とデーヴァタ族のすさまじい引き合いにも耐えた蛇王である。その攪拌の後、神々はブラフマー神のもとへヴァースキーを連れて行き、創造神へ救済を求めた。

「聖なる創造神ブラフマー様！このヴァースキーは、呪詛を恐れひどく悩んでいます。どうか、母カドゥルーから生じた彼の心の棘をぬいてやってください。親族の幸せを願っている彼は、とても良い蛇で我らに協力してくれています。どうか好意をかけてやってください。彼の心痛を鎮めてください。」

創造神ブラフマーは告げた。

「蛇達は多すぎ、恐ろしい力を持ち、残酷で猛毒を有する。私は、カドゥルーから呪詛が発せられた時、生類の安泰を願って止めなかった。しかし、正しい蛇達が救われる方法も示されるべきであろう。これから言うことをよく聞いて実行なさい。」

ヤーヤーヴァラの家系にジャラトカールという聡明な聖仙がいる。

彼は感覚器官を完全に制御し、世俗を離れておる。そのジャラとカールにアースティーカという名前を持つ偉大な息子が生まれれば、呪われた蛇祭祀は、彼によって中止されるだろう。そうすれば、正しき蛇達は、救われるはずだ。」

神々は尋ねた。

「その世俗を離れた苦行僧は、誰とどのようにして子供を残すのでしょうか？それは、大変なことではありませんか？

「神々よ、その強力なブラフマナ、ジャラトカールは、彼と同じ名前の娘に、その息子を産ませるであろう。ヴァースキーよ！お前には、ジャラとカールという妹がおるであろう。『ジャラー』とは、滅亡のことであり、『カール』とは恐ろしいという意味である。夫となる苦行僧にとって、身体は恐ろしいものであり、彼は激しい苦行によって次第にそれを滅した故に、そう呼ばれている。

さあ、今やその時だ！苦行に専念しているジャラとカールにお前の妹ジャラとカールを与え、子を産むのだ。それはきっと成就するであろう。」

蛇王ヴァースキーは、ブラフマー神の言葉を聞き、多くの蛇達に彼を見張らせた。

「ジャラトカールが、妻を娶りたいと望んだらすぐ知らせよ！その時、我が妹を娶らせ、我が一族の幸福を得るだろう。」

ジャラトカールの物語

さてその、大苦行者ジャラトカールである。彼は、家をもたず、聖地を巡りながら苦行に勤しんでいた。苦行をする姿は、まるで、自分の体が邪魔であるかのようにであった。彼は、風を食べ、口から食事を摂ることはなかった。そして、次第に憔悴していったのである。

ある日のこと、ジャラトカールは、洞窟の中で顔を下にしてぶら下がっている祖霊たちを見て驚いた。祖霊たちは、痩せ衰え、ヴィーラナ草に支えられ、ぶら下がっていたのだが、その草もそこに住むネズミに咬みちぎられ僅かに残っているだけだった。

ジャラトカールは彼らに聞いた。

「あなた方は誰ですか？あなた方を支えている草はもはやネズミに食われあと少しだけしか残っていませんよ。たぶんすぐに切れるでしょう。そうすれば、あなた方は落ちてしまうのではありませんか？苦行で備えた私の力で、何かお役に立つことができますか？私もこれまで苦行を重ねてきましたから、かなりの力を持っております。何でもおっしゃってください、お力になりますよ。」

「ありがとう、しかし、苦行の力では、我らの苦境を救うことができないのだ。聞いておくれ慈悲深きお方よ！

我らは、ヤーヤーヴァラ族の聖仙である。我らの子孫には、ジャラトカールという偉大な男がいるのだが、彼には妻も息子も縁者も全くない。それどころか、苦行に励み、自らの体を滅ぼし、子孫を残すことなど一切考えてはおらぬようなのだ。それゆえに、我らは清らかな

世界からここまで堕ちてしまったのだ。我らには子孫という糸が、無くなったのだ。

慈悲深い御方よ！ジャラトカールという男に出会ったら『お前の惨めな祖先たちは洞窟で頭を下にしてぶら下がっている。子孫を作れ、祖霊たちには、お前という糸しか残っていないのだ！』とってください。『我らを支える草は家系、それをかじるネズミは、時間である。無慮で情の無いジャラトカールによって、我らは根を切られ、墮ち、時間により分別を失い、罪人のように奈落へ落ちようとしている。苦行も祭祀も、あらゆる浄化も子孫に比べれば取るに足りぬものだ。ジャラトカールに会ったら、ここで見たことを全て告げ、妻を娶り、息子を作るように忠告してください。我らを助けるとして…。』

これを聞き、ジャラトカールは悲しみと苦しみのあまり涙で声を詰まらせ祖霊たちに言った。

「私が、そのジャラトカールです。あなた方の罪深い息子である。どうかお許してください。私は射精をせず、この身体を後生に到達させたいと願っておりました。しかし、皆さまがぶら下がっている姿を見て私は、その誓いを止めようと思います。皆さまのために私は結婚いたします。もし、いつか、私と同じ名前の少女を娶れば…、そして、その女性が自ら進んで供物として私に与えられ、私が扶養をしなくても良いならば、彼女を妻といたします。お約束しましょう！」

祖霊たちにこう言うと洞窟を離れ、妻を求めて地上を遍歴した。しかし、そのような条件がそろはずもない。また、世間からは、「あなたは、老人ですから。」と言われ相手にもされなかった。

祖霊たちの姿が目に見え、絶望しながらジャラトカールは森へ入って叫んだ。

「ここにいる生き物達よ！聞いておくれ。動くもの、動かざる物、隠れている物、全てに問う！誰でも良い、何でも良い、私の願う条件にあった娘がいれば、どうか結婚させてくれ！」

ジャラトカールを見張っていた蛇達は、今こそその時とばかり、蛇王ヴァースキーへ報告した。蛇王は、急いで彼のもとへ向かい妹との結婚を申し出た。

「ああ、最高の苦行者よ！あなたの話を聞きましたよ。私の妹の名前は、あなたとの同じジャラトカールと言います。この徳性高き妹をどうぞ妻として迎えてください。もちろん、蛇王である私が妹を養ってゆきます。あなたがその心配をなさることもありません。さあ、どうか妹を受け取ってください。」

自分の条件にすべてそろったのを確認し、ジャラトカールは蛇の住処へ行った。そして、作法に従い蛇王の妹とめでたく結婚をした。

妻を伴って蛇王が用意した美しい寝室に妻と入ったジャラトカールは、夜を過ごし、妻に告げた。

「決して私に不愉快なことをしてはならぬ。言葉にしてもだめだ。もしそのようなことがあれば、私はお前を捨てこの家を出てゆく。いいか、心に留めておけよ。」

蛇王の妹、妻ジャラトカールは、気難しい夫を恐れながらも、「そのようにいたします。」と承諾した。かくして、誉れ高い妻は、夫に気に入られようと一生懸命に仕えた。

そして、ある時、受胎に適した時期が来た。沐浴をして夫の傍へゆき、めでたく子を宿した。それは、焰のような胎児で、最高の熱力を備え輝いていた。

それから時が過ぎ、苦行者ジャラトカールは、妻の膝枕で眠っていた。よく眠っている様子であったが、もうすぐ陽も暮れようとしている。蛇王の妹は、迷い始めた。

「どうしようか…。夫を起こすべきか、起こさずにおくか。彼は気難しいし、かといって、夕刻の護摩祭祀をしなければ、法に反することになる。起こせば不愉快な思いをさせ怒らせるかもしれない。かといって、起こさなければ、日々の御勤めを疎かにしてしまう…。でも、法を守ることの方が重要だわ。」

蛇王の妹は決意し、熟睡している夫にやさしく声をかけた。

「起きてください、日が沈みます。夕刻の護摩祭祀の時間です。どうか目をさまし、法を行ってください。」

すると、夫ジャラトカールは、唇を震わせて怒りながら言った。

「うるさい！お前は、侮辱したな。もう、お前の傍にはいたくない。私が眠っている間、太陽は恐れをなして沈もうとしないだろう、私はそう思っている。」

「決して、あなたを侮辱して起こしたわけではありません。あなたが法を怠ることの無いように考えてのことです。」

「黙りなさい、何と言われようとここを出る。兄には、『出ていった』と告げなさい。お前も悲しむ必要などないぞ。」

「罪もない私を捨てることは非法ではありませんか。法を守るあなたが、法を守る私を捨てるとは…。私の兄は我が一族を救おうとあなたに私を与えました。あなたの息子が得られれば、我が一族は幸せになれるのです。どうか、あなたとの結婚が無駄になりませんように、お願いします。私の胎児が無事に産まれる前に、私を捨てるなど言わないでください。」

「それには、心配におよばん。お前の宿した子は、消えることの無い焰のような聖仙であり、最高の徳をもち、ヴェーダ聖典と補助学に通じた者である。」

苦行者ジャラトカールは、こう言い残して去り、再び苦行に励んだ。

アースティーカの誕生

夫が立ち去ると、蛇王の妹は急いで兄のもとへ行き報告した。ヴァースキーは、落胆する妹に声をかけた。

「もう悲しまないでおくれ。お前を与えた理由と目的を知っているだろう。我ら一族の安泰のために、お前に息子が出来れば、我らは救われるのだ。」

ところで、お前に子は授かっているのか？

あの男が約束を守らずに去るとは思えない。お前に直接きくのもおかしなものだが、これだけは。どうしても知りたいのだ。お前の夫は、あまりにも厳格な苦行者で怒りっぽい、これ以上、彼を引き留めておこうとも思わぬ。逆に、彼の呪いを買うかもわからん。」

「お兄様、ご安心ください。私は息子のことを尋ねました。すると、彼は私のお腹をさして、『ある(アースティ)』と告げて去っていったの

です。ふざけている時も、彼が嘘をいったことはありません。お兄さんにも『心配するな』と告げるよう、言われました。私は、お兄さんの、その胸にある大きな苦悩がとれますようにと、願うばかりです。」

蛇王ヴァースキーは、その言葉を聞いて、安心して喜んだ。

やがて、蛇王の妹は、輝かしき息子を産んだ。神の子のような男の子は、成長し高名な聖仙からヴェーダ聖典を学んだ。彼の名前は、アースティーカと言った。胎内にいる彼を父親が『ある(アスティ)』と言って森へ去っていったことから、その名がつけられた。彼は幼いころから警戒を守り、知性、精神力を備え、蛇族に平和をもたらし者として、蛇王のもとで大切に育てられた。

蛇祭祀(サルパストラ)

—さて、場面はバラタ族の宮殿(ハスティナプラ)へと変わる。—

幼くして国王となったジャナメージャヤ王は、父パルクシットが、どのような最期を遂げたのか家臣に尋ねた。

「王様、これまで申し上げにくかったのですが、知っておくべき時が来たということでしょう。あなたの父上パルクシット王は、それは素晴らしい王様であられました。しかし、ある時、狩りに出かけられ、疲れ果てて聖者の庵に水をもらおうと助けをもとめた所、無視をされてしまいました。疲れしておられた王様は、沈黙の行の最中であることに気が付かず、無礼な態度に怒り、その首に蛇の死骸を巻き付け帰ってしまわれたのです。それを見た聖者の息子は、タクシャカという蛇

に咬まれて死んでしまえと呪いました。一度、発せられた呪いは消えることはありません。我らも必死にお守りしたのですが、果実に潜んで忍び入った大蛇タクシャカに咬まれ焼かれ、お亡くなりになってしまったのです。どうぞ、望まれることがあれば言ってください。我らはお手伝いをいたします。」

若きジャナメージャヤ王は、父親の悲惨な死を聞き悲しんだ。そして、クシャトリヤの血は大蛇タクシャカと蛇族への怒りを掻き立てた。私は、父の復讐をせねばならない、あの邪悪なタクシャカに！タクシャカはあらゆる手立てで、私の父を死へ追いやった。奴は、私の父を毒の火で焼いたゆえに、私もあの悪い蛇を焼きたいと思う。誰か方法を知っておるか？」

「王様、申し上げます。神々が、まさにあなたのために作った祭式が古物語にございます。それは、サルパサトラという名で知られ、これにより、蛇を呼び寄せ護摩の火で焼き尽くすことができるでしょう。」

「よし！早速執り行うぞ、準備せよ！」



かくして、準備がすばやく為され、蛇祭祀が始まった。祭官達は、黒衣をまとい、煙で目を赤くし、マントラと共に護摩を焚いた。一切の蛇の心を戦慄させつつ、多くの蛇を火の口に供えた。蛇達は、燃え盛る炎の中に、のたうちまわり、跳ね回り、息をきらせ、絡みあって落ちていった。白い蛇も、青い蛇も、黒い蛇も、老いも若きも恐ろしい

叫び声をあげながら燃やされた。何十万という蛇がなすすべもなく死んだ。

蛇王ヴァースキーにも異変が起き、妹へすがる気持ちで言った。

「妹よ、私の身体は苦しみで燃やされている。私は迷妄により沈み込んでいるようだ。目はひどく回り、心臓は張り裂けんばかり、カモ失せ、やがてはあの火へ落ちてしまおうだろう。

このジャナメージャヤ王の復讐の祭祀は、我らを滅ぼすためのものだ。妹よ！今やその時が来た。お前の息子アースティーカをあの蛇祭祀のもとへ行かせ、すぐにやめさせておくれ。ブラフマー神は、我らに告げた。ヴェーダ聖典を修得した最高の息子に、我らを救ってくれるよう言ってくれ！」

蛇王の妹は、息子のアースティーカを呼び全てを語った。

「わかりました。蛇王ヴァースキーよ！私があなただを解放いたします。安心して下さい。あなたに危険はありません。今から、ジャナメージャヤ王のもとへゆき、マントラにより彼を満足させ祭祀を終わらせましょう。全てお任せください。あなたが私に寄せる信頼は、決して裏切られることはないでしょう。」

こうして、アースティーカは、急いでジャナメージャヤ王のもとへ向かった。しかし、門番達は、若き聖者を決して中へ入れようとせず、簡単に祭式場へ入ることは難しかった。

そこで、アースティーカは、祭祀を素晴らしく褒めたたえる言葉を唱え始めた。この賛歌を聞き、王や祭官、司祭や祭火の全てが喜んだ。

「彼は、子供ながら長老のように讃えてくれた。その叡智は神々に匹敵するであろう。皆の者、この若き聖者を受入れてやってくれ。」

すると祭官達は言った。

「王様！しかるに見るからに子供であろうとも、聖者の願いはすべて、引き受け叶えばなりません。よろしいですか。」

「わかっておる。若き賢者よ！あなたの望みを言ってごらんなさい。私は何でもその通りに聞いてさしあげよう。」

聖者に施しを好むジャナメージャヤ王が、このように言ったその時、他の司祭が叫んだ。

「王様！まだ、タクシャカは火の中へ落としておりません！いわんや、未だこの祭祀にも呼び寄せることはできておりません。願いを聞くのは、後にしてください。」

「そうであった！皆の者、全力を尽くせ、タクシャカをここへ引き摺り落とすのだ！」

「王様、やっかいなことに、どうやらタクシャカは、友人のインドラ神に守られているようです。いかがいたしますか？」

「なぜゆえ、インドラ神がタクシャカを守っているのだ…不思議なこともあるものだ。かまわんインドラ神をも火へ落とすがごとく、祭祀を続けよ！」

司祭たちは王の命令に沿ってマントラを唱え続けた。

すると、インドラ神がその天空へ現れた。天車に乗り、神々に讃えられつつ、雲を従え、天女や半神達を引き連れていた。タクシャカもインドラ神の衣に隠れ潜んでいた。さすがの大蛇も護摩祭祀の力に怯えて姿を見せない。

司祭たちは告げた。

「王様！今やタクシャカは、あなたの支配下にあるも同然です。恐怖にかられ、うめく咆哮が聞こえます。インドラの力も及ばず、ぐったりとして気を失い、空中で、もだえつつ近づいてきます。激しい溜息をつきながらここへ落ちてきています。この祭式は成就したも同然、今であれば、さきほどの若き聖者の願いを聞く余裕はございます。」

ジャンAMEージャヤ王は安堵と喜びの表情でアースティーカに言った。

「無比の童子よ！あなたにふさわしい願いを私が叶えてさしあげましょう。あなたの心にある願いを選んでいってください。それが無理難題であっても、きっと私が叶えてさしあげましょう。」

タクシャカがまさに護摩の火に落ちようとしたとき、アースティーカは、王に要求した。

「ジャンAMEージャヤ王よ！あなたの蛇祭祀を今すぐやめてください！蛇達がもうこれ以上、護摩の火に焼かれることのないように！」

「それは、困る。金銀や牛など、他の望みであれば何でも叶えてさしあげましょう。だが、この蛇祭祀を今、やめることなどできません。」

「私は、財宝など欲しくはありません。あなたの蛇祭祀の中止を求めます。そうすれば、私の母の一族は安泰なのですから。」

「いや、聖者よ、どうか他の願いを言ってください。」

しかし、断固としてアースティーカは、他の願いを言わず、蛇祭祀の中止のみを求めた。この様子を見ていたヴェーダ聖典を知る全ての祭官達は王へ進言した。

「この若き聖者の願いを叶えるべきです。」

このアースティーカの要求が為されている間、タクシャカは弱り果てながらも空中に止まったままであった。

ジャナメージャヤ王は、考え込んだ。護摩壇には供物は投じられ続けてはいる、しかしタクシャカはそれ以上落下していかないのだ。

アースティーカは、気を失って力尽きていたタクシャカに向かって『止まれ、止まれ』と三度叫んでいた。そうすることで、大蛇は空中に止まったままになったのだ。

この奇跡をみて、祭官達に急き立てられた王は、止む無く決断した。

「わかった、このアースティーカの言う通りにしよう。この祭式を終えよ！蛇達はもう安全だ。この若き聖者を喜ばせよう。」

この言葉を聞き、宮殿には喜びの声が飛びかった。皆が喜んでいる姿を見て王も満足した。ジャナメージャヤ王は、アースティカに声をかけた。

「また是非ここへ来て、私の祭官となってください。」

「承知しました。」

アースティーカは快諾し、ヴァースキーを始めとする蛇族の待つ故郷へ帰った。

「よくやってくれた！我らはどんなお礼をしたらよいだろうか、我々は今、解放され喜んでいる。あなたの望み通りのことをしたいのだ。」

アースティーカは言った。

「この世の人々が、朝に夕に清らかな心で、この物語を読むならば、彼らには蛇の危険が少しも無いようにして欲しいのです。」

「わかった、その通りになるであろう。

ジャラトカールとジャラトカールとの間に生まれた、誓いを守る、誉れ高いアースティーカが、ダルマに基づく者を蛇から守らんことを！」

蛇族を解放した後、アースティーカは、子孫を残しこの世を去った。

以上